

マルパ・ワークショップ 平塚市美術館 ハロウィン仮装作り&ファッションショー

(公財) かながわ国際交流財団 野呂田純一

2018年10月20日(土)、湘南・三浦半島の公立美術館4館をメンバーとする、プラットフォーム型アートプロジェクト・マルパの教育普及事業の一環として、平塚市美術館で、同じ平塚市内の福祉施設であるスタジオクーカ (studio COOCA 以下、クーカ) との共催により、ワークショップ「ハロウィン仮装づくり&ファッションショー」が開催された。

今回のワークショップは、平塚市美術館の学芸員江口恒明さんが同館の隣にあるクーカと協働・連携し、人間関係におけるバリアをはずすという視点から、誰でも表現者になれる「創作と発表の場」を設けたいと考えたのがはじまりである。

クーカのメンバー(知的・精神・身体に障がいのある方々)によるデザインは、どれも個性がかわいらしく、それらがプリントされた雑貨は、セレクトショップや手芸店でも取り扱っているので、目にされたことがある方もいるかもしれない。およそ、生活介護・就労継続施設の一般的なイメージとは異なる、このクーカの活動内容について最初に紹介しておきたい。

クーカは元々、社会福祉法人湘南福祉センターという複合施設の中にあつた、アート部門・工房絵(こうぼうかい)が2009年に独立する形でできたという。その後、隣にクーカのメンバーが調理やホールのスタッフとして働くカフェを併設した「ギャラリークーカ」ができ、ここでクーカのメンバーによるさまざまな雑貨が展示・販売されている。

クーカには県内各地から障がいのある方々が通い、自分の好きなこと、得意なことをしながら、収入を得ているとのこ



「お母さんと一緒に素材をチョッキン」

と。収入を得る道が絵をかいたり、モノをつくったり、歌を歌ったりすることであることに、クーカのユニークさがある。

メンバーの好きなことや特技を伸ばすクーカ

ワークショップに先立ってクーカ施設長の北澤桃子さんから、ギャラリークーカとそのアトリエを案内してもらった。アトリエではクーカのメンバーのひとり、村田義弘さんから、昭和40年代生まれの私が小学生の頃に見たアニメキャラクターのような人物が描かれた、自作の名刺をもらった。

村田さんは20代前半の若さにも拘わらず、「昭和の男のロマン」が好きで先日、それをテーマにギャラリークーカで個展を開いたばかりとのこと。

洗練されたデザイン雑誌に囲まれて、メンバーが絶え間なくインスパイア(触発)されていくこのアトリエから生み出された作品たちに触れていると、様々な社会制約に縛られた日常の感覚から解放されて、自分の中の時間をゆっくりとした流れに変えてくれる。しかし、それだけではなく、メンバーの好みや特技を

伸ばす施設長の北澤さんの才能、そして、プロダクトに仕上げていく際のアーティスト的なセンスなしには、こうした作品は生まれえないとも確信した。

子どもと一緒に「アート」に夢中

今回のワークショップでは、北澤さんをはじめとするクーカのスタッフ

やメンバーの、10人ほどが参加し、一般公募で集まった市内の子どもたち及びそのパパ・ママと一緒に、ハロウィンの仮装を作った。魔女やドラキュラ、骸骨など北澤さん、スタッフ、メンバーがさまざまな仮装をして登場したことで、始まる前からこれから何かが始まる期待感で会場の雰囲気は盛り上がった。

北澤さんのワークショップの説明が終わる否や、最初に動き出したのは、子どもたちではなく、そのパパ・ママであった。まるで「今日は子どもと元気にアートで遊ぶぞ!」とばかりに、素材が積み上げられたテーブルにかけより、子どもの体形に合わせて、切ったり折り曲げたりして、勢いよく服の本体となる身頃(みごろ)を作っていく。身頃ができただ後は、子どもたちもすてきなアクセサリやリボンをつけようと、素材を手にとった。

スタッフたちから、「かわいい」「本物みたい」「かっこいい」とエンパワーされたことで、子どもたちは身にまとった仮装を更にもっといいものにするための想像を膨らませていく。昔懐かしの「ウルトラセブン」や「海坊主」などさまざまな仮



「ドロン」をやるトモヤテンチョ

装が出来上がり、「魔女」になった娘さんに、パパが「杖の柄の色は黄色がいいよね」と言っているのを聞くと、パパもママも「アート」を、子どもと一緒に楽しんでいるのがよく分かる。

仮装したメンバーがいるだけで不思議とゆったり

メンバーのひとり、忍者になった高原智哉さん(愛称・トモヤテンチョ)は時々、椅子に座って「ドロン」のポーズをし、オバケになった伊藤太郎さん(愛称・辻太郎)も各テーブルをあてどなく、ぐるぐる回っている。伊藤さんは「ウルフボーイはオオカミ少年、ウルフガールはオオカミ少女って、英語で言うんだって」と僕に話しかけてくれた。目の前で作り上げられていく子どもたちの仮装に、おそらくは彼らしいコメントで楽しく応じている。

会場のあちらこちらに散らばったメンバーは、いま、自分がしたいことをして楽しんでいるだけなのだが、彼らがそうしているだけで、会場はゆったりとした雰囲気になる。段ボール、クッションテープ、カラー不織布など周到に用意された素材は、どれも身近に手に入るものであったが、質感と色のバラエティーが



「今日は何を作ったの?」

そのまま、更なる楽しさの演出へとつながっている。

一時間半ほどで仮装づくりは終了して、そのまま、全員で館内のミュージアムホールまでパレードした後、ファッションショーが行われた。ショーの冒頭、メンバーのひとり光野七海さん(愛称・七海女王)は「アナと雪の女王」のテーマ曲など3曲を踊りながら歌い、雰囲気を一気に盛り上げた。その後、ジャズバンド「西村崇史とスウィングンポストマン」の3人が鳴らす陽気なナンバーをバックに、司会のクーカスタッフが、子どもたち一人ひとりに「今日何を作ったのか」、インタビューをした。子どもたちがそれぞれ、インタビューの最後に「決め」のポーズを取ると、会場からは「かわいい」と歓声が上がった。

美術館によるインクルーシブなワークショップから見てくる可能性

見学に来ていた目黒区美術館学芸員の加藤絵美さんは、次のようにコメントを寄せている。



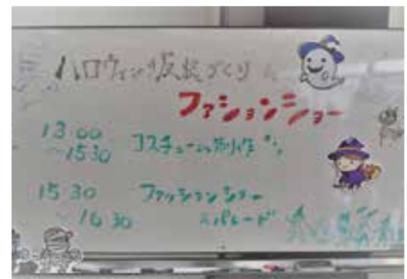
「カラフルな素材でいっぱい」

「集まった子どもと大人が協力し、またスタジオクーカさんが盛り上げることで、魔女や恐竜などさまざまな衣装が、どんどん出来上がるパワーに圧倒されました。ファッションショーでの『七海女王』や子どもたちの発表も、たくさんの笑顔が見られる良い時間になったと思います」

3年目を迎えたマルパでは、来年度、中間報告を行うためのフォーラムを開催予定である。フォーラムでは、これまでの美術館におけるインクルーシブな取り組みが発表される。それらの発表を元に、障がい者や定住外国人など多様な背景を持った人々と美術館とのつながりを、どのように育んでいくことができるのか、マルパだからこそできるものは何かを見定めながら、既存の美術館像のアンラーン(まなびほぐし)へとつなげていきたい。

主催 平塚市美術館/ (公財) かながわ国際交流財団
共催 スタジオクーカ(株) 愉快 生活介護・就労継続B型事業所

マルパ特設サイト <http://www.kifjp.org/mulpa/>
スタジオクーカ <https://www.studiocooca.com/>



「当日はアトリエに集合」



「どれが似合うかな?」



「お父さんもがんばるぞ」



「髪の毛はこんな感じかな?」



「みんなで集合写真」